災害医療

活動報告

附属看護学校

附属看護
専門学校

気仙沼市立病院附属看護専門学校の東日本大震災時における活動

学校概要

気仙沼市立病院附属看護専門学校は、学生定員120名（各学年40名）、３年課程（医療専門課程）の専修学校です。気仙沼市田中地区に位置し、母体病院である気仙沼市立病院と同じ敷地内に設置されています。昭和43年９月公立気仙沼高等看護学校・進学コースとして設立され、昭和48年４月には３年課程の各種学校に変更されました。平成13年４月に専修学校の設置をはかり公立気仙沼看護専門学校に校名を変更、平成18年３月31日気仙沼市と唐桑町の合併に伴い、気仙沼市立病院附属看護専門学校に校名変更となり、現在に至ります。

発災から避難（気仙沼高校）まで 〈2011年3月11日(金)午後2時46分東日本大震災発生〉

この日校内には、育児休暇１名、病気休暇１名、年次休暇２名を除く職員６名と嘱託職員１名、模擬試験を受けている２年生38名と自主学習のために登校していた１年生10数名がいました。１年生は前日と２班に分かれて気仙沼本吉広域消防署にて上級救急救命講習を受けており、震災発生時も19名が消防署にいました。３年生は３月６日に卒業式を終えて学校にはいませんでした。

地震は３分間揺れ続け、段階を追って強くなり、学校が倒壊してしまうのではと思う程、今まで体験したことのない大きな揺れでした。

２年生は全員３階の教室におり、安全を心配した教員に対して３階に行くように指示しましたが、階段の手すりが大きく揺れて立っていることが出来ず、這って階段を上がったと後で聞きました。

揺れが少し弱くなるのを見計らい、教員の誘導で２年生は１階の玄関に向かって階段を一斉に降りて来ました。泣いている学生もいて同級生に励まされていました。３階の教員は残っている生徒の確認をしてから一階に避難しました。教務室の中の書棚は倒れ書類が山のように散乱し、足の踏み場もない状況になっていました。

何度も強い余震が続く中、私たちは学校玄関前の駐車場に退避し、学生寮から避難してきた１年生と共に、60名程の塊となって、治まらない余震に恐怖を感じながらその場に待機しました。間もなく、市内に出かけていた１年生の寮生もあわてる様子で学校に避難して来ました。この日はとても寒く、気がつけば学生はコートも羽織らず避難したため、お互いの体を寄せ合い寒さをしのいでいました。学生は携帯電話や財布も持たずに避難したので、余震が続いてはいましたが、３階の教

室から貴重品や上着を取って来るように指示し教員と共に戻りました。

今にも雪が降りそうな凍りつく寒さをしのぐため、駐車場にあるプレハブの車庫の中に移動しましたが、強い余震でプレハブは大きな音をたてて揺れるので恐怖はさらに強くなりました。なかなか治まらない余震と寒さを防ぐため、さらに安全な病院北入り口の駐車場に学生を移動させました。学生は保護者や同級生に安否の確認を始めたり、ラジオで情報を得ようとしていました。通話は出来ませんでしたがメールの送受信はまだ可能でしたので、そこで初めて消防署で講習中の１年生がそのまま避難している事が確認できました。

津波は学校校門まで押し寄せた

市内の防災無線が大津波の襲来を叫ぶ中、間もなく学校の目の前の田谷公園まで津波が押し寄せてきました。それを見た教員の「津波だ！」との声に、学生と教職員は高台にある気仙沼高校を目指し避難することにしました。気仙沼高校の校庭にはすでに大勢の市民が避難して来ていました。指示された武道場に学生を誘導し終えた時には夕暮れ時となっていて、雪もちらつき始めていました。その時市内では大規模火災が発生し、その煙と炎はすぐ目の前が燃えているような錯覚を起こすほど暗闇を赤々と照らしていました。

気仙沼高校に学生を避難させた後、嘱託の職員１名を学生と共にその場に残し、教務主任と教員５名は病院の救済活動に参加するため母体病院に向かいました。当日の夜は搬送困難なためか、怪我などで来院する市民はあまり多くありませんでした。外来ホールのテレビの前には人だかりができ、気仙沼市の火災が大きく取り上げられていました。私達はそこで初めて自分達が置かれている被災の状況が分かりました。

3月11日の夜に降り積もった雪

教務主任と教員１名が病院に残り、３名の教員は気仙沼高校の避難場所に戻って、学生と共にまんじりともしない中、朝を迎えました。

避難場所としての学校

翌日12日朝６時、総務課長より、学校を避難場所にするので準備をするようにとの指示があり、すぐに準備に取りかかりました。８時には気仙沼高校に避難していた教員も学校に駆けつけて準備に加わりました。

本校が避難場所となった期間は２日間でしたが、延べ120名の市民が避難してきました。その中には、近隣の住民の方だけでなく、気仙沼市立病院のトリアージポストで緑のタグをつけられた方、傷を負ったが自力で歩行できる方、津波にのまれ全身ヘドロまみれの方、一晩中車内で水に漬かり動けなくなっているところを救助され低体温症になっている方などさまざまな方が運ばれてきました。車から救出され全身ずぶ濡れの50代くらいの女性を教室に案内しましたが、「私だけ助かりました。一緒に乗っていた娘はどこに行ってしまったのか。」と放心したようにお話になっていました。寒い教室で暖房器具も乏しかったため、陽の当たる場所の椅子に腰掛けて頂き、冷たい手をさすることしかできませんでした。

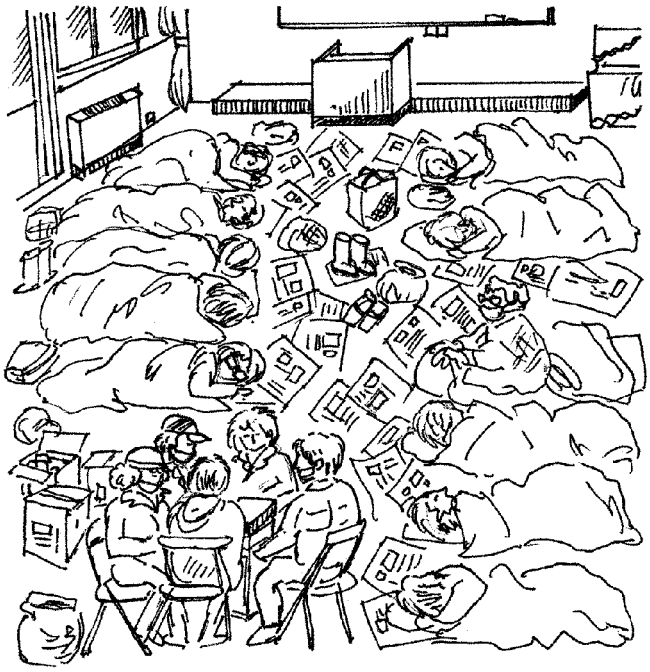
教員は、次々にやってくる避難者の対応に追われました。避難者の支援と併せて名簿作成と身元確認のためガムテープに氏名を記載し胸元に貼ることを行いました。本校の災害時の位置付けは、避難所ではありませんでしたが、それだけ多くの市民が被災し行き場を失っていることが想像できました。

避難所としての緊急災害用の食料の備蓄はゼロに等しく、避難者に差し出せる食料はありませんでした。ただ幸いにも、この日学生を迎えに来た保護者から「我が家は被害が少なかったので、先生方に食べてもらいたい」と御厚意でおにぎり16個いただいたので、それぞれを４等分にしたものと、りんごを８等分にカットしたものを避難者に提供しました。震災後、避難者が初めて口にした12日午前中の食事でした。その後も十分とは言えませんが、差し入れていただいたお菓子やお茶、イオン飲料、透析室から頂いた牛乳を温めて紙コップに少しずつ配ることが出来ました。

12日夜の図書室…車椅子に乗った40名近くの避難者。灯りも暖房も無い中、蝋燭の火のもと一夜を明かす。

食料を全員に行き渡らせることができないこともありました。「震災後から何も口にしていなかったのでひと口でもありがたい。」と喜んで受け取ってくださる方も多かったのですが、中には、教員が自分達の事を後回しにしても一人でも多くの避難者に食べ物が提供できるように努力したにも関わらず、「学校職員は影で食べているんだ。」などの声もあり、避難者への対応の難し

さを思い知らされました。又、部屋の割り当てに関しても、「この部屋より暖かい部屋に入っている人がいるけど、差別をしているのでは」と訴えてくる方もいましたが、学校にはエレベーターが無いため、自力で歩行できる方を２階・３階に、車椅子の方や高齢で歩行に不自由な方は１階に収容することにしていましたので、不公平感が生じないように教員は丁寧に応対していました。



13日朝の講堂…冷え切った床に新聞紙やダンボールを敷き詰めた上に、薄いシーツを掛けただけの状態で、横になられている。

夜になるとさらに寒さが増し、ライフラインが全て寸断されている中、電気もなく、灯油の備蓄もストーブの台数も充分ではありませんでした。ストーブは時間を夜間だけと決めて、さらに限られた場所で点けましたので、学校は冷えきっていました。

照明の代わりにキャッピングセレモニーで使用した蝋燭の残りを灯り代わりにしました。使用している教室、廊下、階段、トイレ至る所に設置し、灯火が切れないように蝋燭の交換と火災予防のために30分おきに巡回しました。排泄介助を必要とする高齢の方も多くいらっしゃいました。

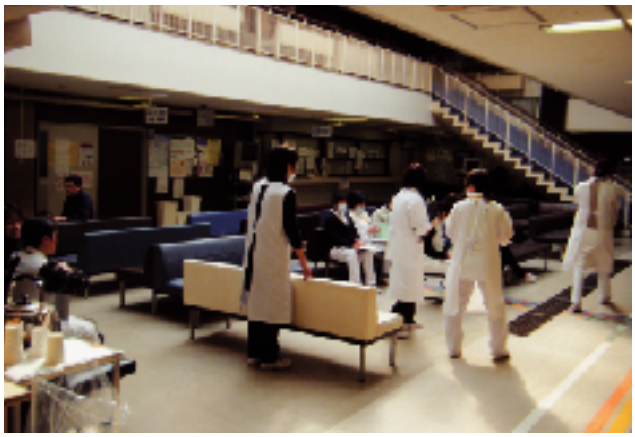
看護学校という場所柄、学内演習で使用するシーツ、毛布、紙おむつなどは準備することができました。しかし120名の避難者全員に行き渡らず、寝具類もあっという間になくなりました。被災者には高齢の方が多く、シーツ１枚を巻いたところで寒さをしのげるはずはないのですが、教員はダンボールや新聞をかき集めて床に敷いたり、身体に巻きつけてさしあげたりしました。寒さのなか車椅子に乗ったまま一昼夜を過ごさなければならなかった方が何人もいらっしゃいました。津波にのまれ命からがら救出され運ばれてきた方の殆どはヘドロまみれでしたが、非常用物資が足りず、着替えることも毛布に包むことも出来ない状況でした。ライフラインが全て寸断された中、私達に出来たことは、ストーブで沸かした湯で実習用の補液を温め、湯たんぽ代わりに当てることでした。それが十分でないことは分かっていましたが、何もせずにはいられませんでした。

断水のため、トイレは汲み置きの水を使用して頂こうと思いましたが、不自由な身体の高齢者の方には難しいことでした。たちまち便器は排泄物であふれてしまいました。教員はトイレ掃除も手分けしてやりました。

13日の夕方、本校にいた避難者は無事に全員ケー・ウエーブ（気仙沼市総合体育館）にバスで移送されました。

母体病院へ救済活動参加

３月12日と13日は避難所となったため、避難者の支援に当たりましたが、避難所が解除された14日より教員は３名ずつローテーションで母体病院の救済活動に合流し、正面玄関での受付とトリアージの黄色及び緑色ブースでの看護に当たりました。それぞれのブースの担当看護師と共に補液の管理やバイタルサインの測定、フォーレ留置、浣腸、車椅子やベッドの移送などを行いました。



食べ物も水も口にしていないという来院者には、外来に設置した飲料水を提供しました。「津波で薬を流されてしまい、岩手県大船渡から10時間以上もかけて歩いて病院までようやくたどり着いたの」と涙ながらにお話になり、玄関前で炊き出しをしていることを伝えると泣いて喜んでいた方もいました。

正面玄関受付では、家族の安否を確認に来院する人で混雑しておりました。どの顔からも焦りと疲労がみられ、靴や長靴はドロまみれで、一縷の望みを託し道なき道を歩き続けようやくここまでたどりついたということが想像できました。結局、安否の確認が出来ずに多くの方が肩を落として病院を後にする姿に申し訳なさで一杯になりました。

学生を気仙沼高校に避難させた後、母体病院の救済活動に加わった

学校運営

この時期、後期単位修得試験を終えたばかりで、その採点と、単位認定の教育審議会を開催しなければなりませんでした。しかし、学校長、副学校長を始め、講師である病院の医師や教員が病院での救済活動を行うため、採点の作業と審議会の開催は不可能な状態でした。

１・２年生に関しては、３月22日までに全員を親元に返すことが出来ました。学校長より学生は自宅待機との指示があり、そのまま春休みに入ることになりました。在校生の始業は４月25日、新入生の登校は４月26日（入学式は中止）に決まりました。

３月17日には、平成23年度の学生実習をお願いすることにしていた外部の施設の被災状況調査を始めましたが、実習調整者は施設との連絡を取ることに苦労しました。実習施設33施設中11施設が壊滅的な被害を受けていることが分かり、学生の実習を受け入れることの出来ない状況でした。東北厚生局の指導もあり実習予定を大幅に見直し、さらにその対策も考えなければなりませんでした。

講師の方々には自宅や職場も罹災されている方も多く、講義をお願いできる状況ではありませんでした。学校の教員が代わって講義をしなければなりません。今年度新しい分野が始まり教員の講義時間が増えていましたが、その準備の時間も作れない状況でした。それでも教員は、4月25日の始業に向けて準備をして行くしかありませんでした。

家が流されたりするなどして実習着がなくなってしまった学生のために、全国の卒業生から送られてきた実習着。特別お願いしたわけではないのに、たくさんの実習着が届いたのです。

3月28日には、学生の自宅の被害状況や流失した教科書、ユニフォームの調査も始めました。ユニフォームについては、お願いしたわけではありませんでしたが、後輩を心配してくれた卒業生がきれいにクリーニングをして送ってくれたり家族の方が持って来て下さったりしてかなりの数が集まりました。さらに文房具などを送ってくれた卒業生が沢山いました。

この震災で罹災した学生は118名中33名で、そのうち気仙沼市へ授業料等の減免の申請をした学生は26名いました。

学生の安否確認

学生の安否確認は、地震直後には携帯電話のメールで連絡がとれていましたが、電波の基地局も大きな被害を受けたことから3月11日の夜には使うことができなくなりました。

本校へ入学を希望している学生とは、自宅にも出身校にも連絡がとれず生存しているのかさえ分からない状況でした。新入生全員が無事であることが分かったのは3月22日でした。

その後、3月6日の卒業生も全員無事が確認されました。学生に犠牲者はありませんでした。

講師の安否確認

外部講師の安否確認は難航しました。4月に入ってから安否確認がようやくできた講師もいました。行方不明の講師の方もいらっしゃり、そのご家族の方とも連絡が取れないまま、新たに別の方に講師をお願いしなければなりませんでした。この被災状況のなかで新しく講師お願いすること、また前の講師の方に対しても行方不明のまま次の講師をお願いしなければならないことは、大変申し訳ない気持ちでした。

残念なことに行方不明だった講師の方は死亡が確認されました。

避難所（気仙沼高校）の学生ボランティア

3月11日（金）気仙沼高校に避難した学生は1年生23名、2年生39名の61名でした。嘱託職員1

名と学生は３月22日まで気仙沼高校に避難しました。連絡のつかない娘の安否の確認をするため山形、秋田、岩手などから何時間もかけて迎えに来た保護者もいらっしゃいましたが、３月22日までに全員が保護者のもとに帰る事ができました。

避難所では学生は４人１組となり24時間体制で以下の活動をしました。

- 高齢者のお世話、特に排泄・食事・歩行の介助
- 避難者の食べ物の配給の手伝い
- ボランティアナースと共に、体調を崩した避難者の病院受診のお世話（昼夜問わず）
- 体育館の掃除、トイレ掃除と水汲み
- 体育館入口での捜索者の応対

学生たちは、次第にボランティアの中心的な存在となり、巡回してきた市の係りの方から、「自分達がやらなければいけない事を学生さんが進んでやってくれて大変助かりました。」と労いの言葉をかけて頂きました。

看護師国家試験全員合格

平成23年３月25日（金）午後２時、３月６日に卒業した37名が全員第100回看護師国家試験に合格しました。本当に嬉しいニュースでした。この結果は、先行きの見えない状況の学校職員と在校生に希望の光を燈してくれるものとなりました。

学校としての災害時の問題と今後のあり方

震災時の状況をまとめるにあたり、災害発生直後の記録があまり残っていないことに気付きました。写真は倫理的に残せない状況だと判断もありましたが、その場では記録どころではない状況でした。

しかし、記録に残すことの意識が薄かったことも事実です。記録は次への対策を考えるとき必要です。記録を克明に残すことの役割も大事な活動であることを学びました。

学生においては、避難時泣き続けている学生とそれを励ましている学生がいましたが、自分の身は自分で守ること、人々を守る側の職業につくという意識教育をしていく事の大切さを改めて感じました。

当校は、平成18年４月作成の気仙沼市立病院災害対策マニュアルにおいて遺体安置所に指定されていました。急遽避難所になり、ただ看護学校として演習用の物品があったのでそれが少しは役に立ちましたが、避難所としての対策（備蓄等）が何もなされていませんでした。また、母体病院と同じ敷地内にあるとはいえ、施設及び設備が独立しています。そのため、病院から数日遅れての通電（３月19日14時30分）、通水（３月18日）でした。

今後、災害時に、学生120名が学校に留まらなければならない状況になることも想定され、以下のような備えが必要と思われます。

停　電　対　策……自家発電機の設置、ろうそく、懐中電灯、電池の備蓄

断　水　対　策……飲料水・トイレ用水の確保
食　　料……１日～２日分の学生と一般避難者分
寒　さ　対　策……灯油、毛布の備蓄、ストーブの台数の確保
一時避難場所の確保……耐震性の高い母体病院の北入口と廊下周辺
収容スペースの確保……被災状況により学生120名と一般避難者が収容できること
学生の安否確認方法……遅れても自ら学校に何らかの方法で連絡を取ることの徹底
情　報　収　集……ラジオ、カメラ
記 録 と 写 真

終わりに

４月26日に新入生（39名）が初めて登校して来ました。気仙沼本吉広域消防署より指導を受け、５月９日にはワンポイント避難訓練「いかなる時・場所・状態においても自分の命は自分で守る～とっさの判断力と行動～」を実施し守られる側から守る側の人になるという意識を高めるための訓練をしました。

看護学校の教員として、震災時の役目はまずは学生の命を守ること、そして無事に保護者の元に返すことです。看護学生として、この震災はまさに生きた実習現場になるのではとの声もなかったわけではありませんでしたが、ライフラインの断たれた学校で、食料も無い状況に学生を留めておく事は出来ません。

後で分かったことですが、自宅待機している学生も、それぞれの地域･避難場所などでボランティア活動をしていました。家が流失したり、家族や友人を亡くし、自分も九死に一生の体験をした学生もいます。

1000年に一度の未曾有の震災を受けた被災地の看護学校の教職員も学生もそれぞれの役割を果たしたと思っています。失うことの多かったこの震災でしたが、看護学生として学ぶことも多かったと思います。この経験をこれからの学習や実践に生かしていって欲しいと思います。